

## 自ら学ぶ教職員 活動報告書

グループ名 SKN 9

テーマ 授業づくりを通して教師も3つの力を身に付けよう

～新学習指導要領を使いこなして実践できる教師を目指して～

### 取組のポイント・成果

#### 【取組の内容とポイント】

##### (1) ワークの実施

- ①教育課程について考えよう（各校の教育課程の現状と課題点）
- ②教科学習の目標設定や内容、「教科と自立活動」について考えよう  
（学習指導要領、学習到達度チェックを活用した実態把握、実践における課題の整理）
- ③表出の理解が難しい児童生徒の評価について考えよう

##### (2) 実践交流（個々に行ったワークの実践交流）

- ・12月11日（土）9：30～12：00 オンラインミーティング
- ・書面による実践交流（構成員から提出されたワークのまとめを書面にて共有）

##### (3) 研修会への参加

- ・8月28日（土）13：00～16：50 障害の重い子どもの目標設定入門セミナー
- ・9月26日（日）13：00～16：50 特別支援教育におけるカリキュラム・マネジメントセミナー【入門編】
- ・10月23日（土）10：00～12：00、12月1日（土）10：00～11：00 特別支援学校における教育課程の編成（講師：福岡教育大学 教育学部 教授 一木薫先生）
- ・1月15日（土）9：30～11：30 障がい重い児童生徒の観かた（講師：香川県立香川西部養護学校 教諭 谷口公彦先生）

##### (4) その他

- ・書籍や研修資料等の回覧及び配付による自主研修
- ※ミーティングや研修会はすべて zoom、webex を利用した。

#### 【成果】

##### (1) ワークの実施と実践交流における課題の明確化及び共有

ワークでは、それぞれのテーマに基づいて実践を振り返った。これまで教育課程を遠い存在として感じていた構成員もいたが、ワークを通して、教育課程は日々の実践に直結しており、身近な存在として、また一人一人が考えていく必要があると感じられるようになった。また、本チームは、肢体不自由及び病弱の特別支援学校で学ぶ重度重複障がいの児童生徒を担当する3校の職員で構成されているが、実践交流をした結果、どの学校の構成員も以下のように同じような課題を有していることが分かった。

###### ① 教育課程に関する課題

- ・十分な議論がなされない、または教科化された理由が全職員に浸透しないまま駆け足で教科化が進んでしまった。
- ・同じ教育課程に在籍する児童生徒の実態差があり、実際の授業展開において難しさがある。
- ・「教科等を合わせた指導」において合わせた各教科の意識が十分になされていない。
- ・学部間の系統性がない。
- ・個別の指導計画の実態が、自立活動に関する項目で整理されている場合が多く、教育課程に教科が含まれていても教科の視点での記述がほとんどない。そのため、教科の視点での実態が整理されないまま、目標が設定されていることがある。

## ② 「自立活動」と「教科」に関する課題

- ・教科学習におけるPDC Aサイクル実施に不安がある。
- ・高等部卒業まで小学部一段階を学ぶ児童生徒への細かな段階を追った目標設定が難しい。
- ・自立活動における学びの履歴をどのように引き継いでいくとよいか。

## ③ 障がい重い児童生徒の観かたに関する課題

- ・児童生徒とかかわっていて「おそらくこういうメッセージを発信しているのではないか」と予測しているが定かではないことも多い。また主観、個人の見方に偏ることも多い。主観、客観、間主観を働かせながら、より確かな実態把握や目標設定を行うために、具体的にどのような方法で児童生徒の姿の意味を確かめていくとよいか。

## (2) 課題解決に向けた取組

- ①教育課程に関する研修では、学習指導要領に教育課程等についてどのように記されているのか、「学校の教育目標—教育課程—個別の指導計画—年間指導計画—単元計画—授業」の関連について、個別の指導計画に何を記載するとよいか、教科学習と自立活動の違い等について、理解を進めることができた。
- ②教科学習に関する研修では、知的教科の小学部一段階で学ぶ児童生徒の発達段階をより細かくとらえて実態把握する方法のひとつとして、学習到達度チェックリストについて学びを深めることができた。
- ③障がい重い児童生徒の観かたについては、教師の主観によるとらえをより確かなものにするためには、仮説を立てて検証をすること、かかわりの前後で何が変わったのかをよく観察すること、児童が教師（かかわり手）の意図（言語）をどの程度理解しているかを把握した支援を行うことが大切であることが分かった。

本活動では教師自身も「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性」を身に付けることをテーマとした。そのため、研修会の前に、それにかかわるワークを行い、それぞれの構成員が課題意識をもって講師の先生から講義や助言を聴いたりした。そうすることで、「学習指導要領の読解、発達段階に関する知識、児童生徒の表出をより丁寧に読み解くための視点といった専門性【知・技】」を身に付けたり、「身に付けた専門性を生かした教育課程や日々の実践の省察、改善策の模索【思・判・表】」をしたりすることができた。さらに「意見交流等の活動を通して新たな気付き【学びに向かう力、人間性】」も生まれた。このような成果が得られたのは、個々の構成員が自ら考え学びを深めたとともに、同じ課題をもつ複数の構成員が同じ方向に向かって、意見を交流しながら、ともに学びを深められたことが大きい。「主体的・対話的で深い学び」の大切さについて、身をもって感じることでできる取組となった。

## 今後の課題

新学習指導要領が施行され、重度重複障がいがある児童生徒の教育課程に関わって、自立活動と教科について検討することになったが、多くの学校に課題や悩みが生じた。旧学習指導要領下における10年は、重度重複障がいの教育において自立活動について重点的に取り組んできた学校が多く、この間に教科等の多くを自立活動に置き換え、実践を重ねてきた世代の教員にとって、重度重複障がいの児童生徒を対象とした教科学習のイメージがもちにくかったことが理由の一つであると考え。今回、学習指導要領の執筆にも関わった講師から教育課程、カリキュラム・マネジメント、教科学習等について直接話を伺うことで、本活動の構成員において理解が進み、改めて学習指導要領を読み解くことの重要性、教育課程や各種指導計画の様式の見直しの必要性について実感できた。しかし、実際に見直しをしていくには、一部の職員ではなく、組織として動いていかなければならない。本活動で得た学び、感じた現在の実践への疑問といった構成員の気付きを、ともに指導する職員に広がっていくように、声に出していくことが還元の第一歩だと考える。特別支援学校は一枚当たりの職員数が多い。いろいろな見方・考え方をもち職員が一丸となることには難しさも伴う。しかし、同時に、コロナ禍において人とかかわりが多い時代に、相談したり議論したりできる仲間がいつも近くにいる。本活動が終了後も、今後も一人ひとりが学び続けるとともに、個々の気付きについて語り、他者の気付きを聞き、対話をしながら、目の前にいる児童生徒へのよりよい教育を、仲間とともに目指していきたい。

